

夏期講習だより

夏期講習記録

文責 研修委員長 有岡 竜也（駒ヶ根東中学校）

令和7年7月29日、30日に行われました第76回夏期講習の記録・まとめです。

のべ参加者数56名、皆様に支えられて講習が無事終了いたしました。
文字数が多いですが、ご容赦いただき、ご一読いただければと思います。

■開講式より

○松崎 善幸 上伊那教育会長 ごあいさつ

皆さん、おはようございます。連日猛烈に暑い日々が続いていますが、夏期講習へのご参加いただきありがとうございます。

この「夏期講習」ですが、今年で76回となりました。始まりは戦後間もない昭和24年、飯島町の西岸寺で、上伊那郡下の青年教師が中心となって始めた思いが、本日へとつながっています。



突然ですが朝ドラの「あんぱん」をご覧になっている方はおられるでしょうか？ 現在はだいぶ話が進んで、東京へ出た「やなせたかし」と、その妻となる「のぶ」が活躍している場面になっていますが、その「のぶ」は、ドラマの中では、戦時中は教師として子どもたちの前に立ち、当時の先生が誰もそうであったかと思うのですが、目の前の子どもたちに軍国主義的な教育を積極的に進めていました。ところが、親しい者の死や敗戦という現実を突きつけられ、自らが進めてきた教育と向き合うこととなり、様々な思いから教職を去ってしまいます。6月頃にこのあたりの物語をやっていました。

令和7年度

第76回 上伊那教育会 夏期講習

期 日 令和7年7月29日(火)・30日(水)

会 場 上伊那教育会館 講堂

テキスト 『西田哲学選集』第一巻「西田幾多郎による西田哲学入門」 第二部『善の研究』

第一編「純粹経験」 第一章「純粹経験」
第二編「實在」 第一章「考究の出発点」
第六章「唯一實在」
第七章「實在の文化発展」
第八章「自然」
第九章「精神」
第十章「實在としての神」

講 師 松本啓二郎 先生(大阪教育大学教授)

助 言 者 唐澤 正吉 先生(元高遠中学校長)

講演 会 松本啓二郎 先生(大阪教育大学教授)
『現代と「労働者」--E・ユンガーの思想から』

7月29日(火)		7月30日(水)	
受付	9:00～9:20	受付	9:10～9:30
開講式	9:25～9:45	討議4	9:35～11:20
討議1	9:50～11:35	まとめ	11:20～11:40
昼食	11:40～12:35	昼食	11:40～12:40
討議2	12:40～14:25	講演会	13:00～14:40
討議3	14:45～16:30	閉講式	14:40～15:00
諸連絡	16:30～16:40		
記念写真撮影	16:40～16:50		

上 伊 那 教 育 会

第76回夏期講習運営委員会

ました。

ここ上伊那でも、当時は同様のことが起きていたようで、上伊那教育会史に、その当時の上伊那の先生方の混乱の状況が記されていますが、昭和20年の12月と21年の3月に、校長や先生方の多くが退職されています。県下で1182名という数が出ていましたが、これがどの位多いかはよく分からないのですが、多くの先生方が自らの過去に悩み、そして新しい教育について、不安と苦しみの中を進んでいった、当時の様子がうかがえます。

そんな混乱の中から、必要に迫られて生まれてきたのが、この夏期講習…哲学研修なのだと思います。今年は戦後80年という節目ということ、これまでも何回もお伝えしてきましたが、そういう教師にとって苦しい時代だった、そしてそれだからこそ、何とか自分たちの本物の学びを進めようとした、当時の先生方のそういう思いを感じながら、今日のこの夏期講習を始めたいと思います。



開講式で仰望を斉唱 指揮は赤穂南小の藤澤和敏先生。伴奏は清水ひろみ研修部長

今年も、この日のために、事前に4回の読み合わせ会を行い、学びを進めてきました。大阪教育大学教授の松本啓二郎先生には、読み合わせのポイントについてご指導をいただき、元上伊那教育会長の唐澤正吉先生には、読み合わせ会での討議を踏まえながら直接ご指導をいただきました。心から感謝申し上げます。レポートを作成、発表して下さった先生方、運営に携わっていただいた先生方にも感謝です。この2日間は、松本先生からも直接ご指導をいただけます。松本先生、唐澤先生、どうぞよろしくお願いいたします。

終わりに、先ほど紹介した上伊那教育会史にあった言葉を紹介します。

「テキストや講演の内容は専門用語が多く理解が困難です。然し、その歯の立たない難しいものに立ち向かい、かじれなくても、それを少しずつ舌で嘗めているうちに溶け出してくるような勉強こそ、私たちが子どもたちに常に要求している学ぶ態度であり、私たちはそういう人間像に向かって教育の仕事を毎日しているのだと思うのです。そういうことを行ずる教師の後ろ姿が、子どもにとっては百の説法より貴重であることは論を待たないことです。」

以下は省略しますが、無心になって「善の研究」に立ち向かう時間になればと思っています。ご参加いただきました先生方にとって、実り多き2日間となりますことをお願い申し上げ、開講の挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願い致します。

■討議①～④より

○松本 啓二郎 先生（大阪教育大学 教授）のご指導

★討議①

- ・鈴木先生は始めに純粹経験は大人になると失われていくのではと疑問を呈しているが、テキストを読み進めていく中でそうではないと読み取り、音楽家のことであるとか、野球選手の投球動作のことであるとか、あるいは漢字の事といった具体的な例を考えて、西田が伝えようとしていることに関して理解を深めようとしてくれている。
- ・4番目に挙げられている例は非常によい。にわたりの卵のふ化の瞬間を食い入るように見つめている男の子というのは、これは純粹経験の例として西田のテキストに出てきてもよい例だと思う。なぜかという、生命ということが一つポイントになっている。西田は実在の発展というのはまさに生命活動だと捉えている。実在の本質なるものがその場に表れていると考えられる。
- ・そう考えてみると各グループ挙げた純粹経験の例も生命の活動あるいは、人間の身体の活動が関わっている。身体が働くという生命的な現象というのが、西田の純粹経験の把握の根底に何かしらあると言えると思う。
- ・Bグループから教育には五感を刺激することが重要だという話があったが、まさにそれもその通りだと思う。五感まさに生命の人間の本質である。純粹経験というのは形や程度は違っても我々の感覚がそこに入ってくるような経験である。
- ・Cグループの音楽会の例も、音を聴くということはまさに感覚的なものである。またおもしろい例として出てきたのが、大豆を食べるということ。これも、まさに生命の活動に関わってくることである。ただ観察しているよりも、そこには喜びや楽しさが出てくるであろうと思う。
- ・鈴木先生はレポートの中で、純粹経験を「心に衝撃を与え」、「心に残るもの」として捉えているが、西田自身がこういう言い方をするかなと思うと、少し誤解を招く恐れがあるのではと思った。心に残るというと、何か心というものが最初にあって、それに経験が絡まって、それが残り続けるという感じがする。おそらく心に残るほどの衝撃的な経験というのは、衝撃的な経験があって、はじめて心というものが現れてくると捉えられるものではないかと思う。心に残るといっても過ぎ去った過去のことを思い出すということではなく、テキストの中で「過去と感ずるのも現在の感情である」と言われているように、純粹経験においては単純に過去のことが記憶に残って思い出されることではなく、心に残っているものが再び現在になって現れてくるという形で捉えられるものだと思う。



討議①を分担した哲学研修委員の先生方



- ・各グループから、純粹経験は言語化できないという話があった。Aグループの中で、生け花をうまく生けられた時またはうまくいかなかった時、それを言葉でうまく表現することは難しいという話が出てきた。分析して、美しいとされる基準を数値化して、これはこの数値を満たしているよねとしても再現することは難しいし、できない。純粹経験は、データ化され言語化された時点で失われていると考えることができる。
- ・矛盾と対立はずっと続くのではなく、また新たな統一を生み出し、また新たな矛盾と対立が生じてくる。なぜ、新たな統一が生じるのか。どうしてなのかを考えてみると面白い問いになると思う。

- ・Eグループからテキストの読み方について話が合った。純粋経験の発展段階に似ている。ある段階で西田の言っていることはこういうことだろうと理解する。でも他の考え方と突き合わせる、そこにある種の対立が生じ、でもこのように統一的に考えられるなというように、テキストの読み方も対立と統一を繰り返し進んでいくのだと思う。

★討議②

- ・「ピアノの練習」の例は、実際の自分と理想の自分があるという良い例。これ（現実・実際と理想）は、日常生活の中にあること。
- ・必ず「良し悪し」に関わっている。「良し悪し」は、人によって違うかもしれないが「しっかりしなきゃ。」（理想）と思っている。「良い方向」「＝「理想」に関わって生きていることが現実。休むこともあるが「休んだ方がいい」という言うことも「いい方向」＝「理想」に関わっていること
- ・143ページ3行目「かくして、我々の生きている間は、どこまでも自己を発展し実現してゆくのである」とどこかわからないけれどどこかに向かっている（どこに向かっているか、ということは大きな課題）
- ・143ページ4行目「生物の生活及び発達についてみても。かくのごとき実在の方式を認むことができる」（理想と現実の対立は）生物そのものにみられるもの＝活動する生命にかかわる。
- ・140ページ17行目「他人との意識もまた同一の理由に由って連結して一と見做すことができる」
- ・「練習した曲を子どもがきく」場面で、「曲を弾いている自分の意識と曲を聴いている児童の意識」は同一の意識。別なものではない。「自己」と「対象」の区別なし。
- ・141ページ13-15行についての誤解を原田先生が正してくれた。141ページ1行「我々の意識の根底には普遍的なものがある」ということを西田は言いたい。
- ・139ページ4行「時間というものは我々の経験の内容を整頓する形式にすぎないので、時間という考えの起こるにはまず意識内容が結合せられ統一せられて一となることができねばならぬ。～意識の根柢には時間の外に超越セル普遍的或るものがあるといわねばならぬことになる」
- ・人間の考える時間は、過去から今、今、今、・・・と数直線上につながっている。しかし、深海魚は人と同じ時間だろうか、同じ時間の枠組みだろうか。小さな動物、大きな動物、海や陸の動物、それぞれ時間の感覚は違うのではないかと、考えることができる。
- ・時間は、経験を整理するための形式だから、時間の外に普遍的なものがある（なくてはならない）
- ・無意識の純粋経験が意識化して、また無意識の純粋経験があらわれ、それがまた意識化していく。その純粋経験は違うのに、なぜ同じ「純粋経験」というのか・・・松本先生：「きっと西田は同じ純粋経験というだろう。長い年月の中のはんのごくごくわずかな純粋経験だから」
- ・143ページうしろから5行「後の意識より前の意識を見た時、自己を対象としてみるができるように思うが、その実



はこの自己とは真の自己は現在の観察者すなわち統一者である。

～自己はかくの如く無限の統一者である」

・反省されている自己（自分に対して） それを考えている自己 は違う自己である。同時に考えている自己は「反省されている自己」になる それを考えている自己 がいる。同時に、考えている自己は「反省されている自己」になる その連続。

・「わたしがみた世界」をかく時、考えることはできる唯一かけないものは「わたし」である。「わたし」とは「いいよのな いわたし」例：目は目を見れない

★討議③

- ・時間の概念に関して、ピアノの練習について「理想と現実」、昨日の意識と今日の意識というレポートがあったが、テキスト138頁に時間についての記述がある。時間は数直線のように見えるが、西田哲学においては客観的なものではなく、それぞれの主観によって長さが異なるものだと考えている。

- ・松田先生のレポートでは言葉(言語)=対象化・概念化・表象化に結び付けており西田哲学でもそのように定義付けているところもあるが、それ「だけ」ではない。例えば幕末の俳人井上井月の「柳から出て行舟の早さかな」という俳句があるが、これは概念化されているわけではない。ことばがあるから純粹経験が失われるわけではない(朝の「おはよう」のあいさつが対象化させているわけではない)。
- ・木と石の絵を描いて下さったが、本人だけでなく他の人からもそう見える(客観的にもそう見える)。
- ・考えられる私と、考えている私は異なるもので、最も偉大なるものである「自己」と滅せられる「自己」も異なるものだ。
- ・Eグループの討議について、147頁6行目に「自然には自己がない」と言っておきながら149頁5行目では「自然に自己を具えている」と言っている。西田の言う自己とはCグループも述べたが、統一されたものだ。
- ・Bグループから純粹経験は子どもに多くあるが大人になると失われるのではないかとあったが、そのままではなく経験して心の中に重ねられることによって心の豊かさにつながっていく。
- ・衝突について、子どもはそのうちまとまり、大人はなかなかまとまらない。これは絵についても似たようなもので子どもは描けるが大人は描けないと思われがちだが、これは程度の問題があるかもしれない。
- ・世界は見えるが、世界を見ている私は見えない。



★討議④

- ・佐藤先生のレポートに関して、「神は“いる”と仮定するものではなく、求め続けるもの」という形で読み解き、理解をしていた。これは、西田が第2編第1章114ページから115ページにかけて書かれていた理論と実践の部分と重なってくる。西田の言う西洋的な視点から神を理論的に証明しようとする、最終的には間接的に外から証明することになるが、そうではなく、我々が実践的に神を求めるという欲求と、理論と実践が別物ではないということもあり、佐藤先生の読み解きは大体の意味において西田の言っていることに当たっているように思った。
- ・佐藤先生の指す「大いなる精神」において、授業の中での多くの意見の中で、ある種の矛盾対立が生じてくる。そういうことを指しているのだと思う、それは西田の言う実在につながり、その中では佐藤先生が子どもたちから見出したものが、もっともっと限りなく大きくなることで、宇宙の大精神とも(神)へと繋がっているのかと思った。
- ・レイチェルカーソンとの繋がりに対して、自然に対する驚きのようなもの、それは生命、事前のものと根底において関わりがあり、センスオブワンダーは、西田の言う純粹経験へ繋がっているとも思う。
- ・子どもたちの言う「神っている」などの表現について、西田は160ページ3行目において、「神という語を持たないものは無い」と述べているが、現代においてはどうなんだろうという視点は考えるものだと思う。現代の若い世代の言う無宗教は本当に無宗教なのだろうか。特定の宗教を指しているわけではないが、自分を超えている、我々常人を超えている超人間的なものを考えて「神」としているのではないだろうか。こういった世界との関りについて言うならば、Cグループの話の中で、亡くなった人についての話題になった。死んだ人について考えることは、見方によっては何ら得にはならないはずである。でもやはり、そういったことを考えながら我々は生きている。それも広く言えば宗教性と言ってよいのではないか。西田は、哲学の終結は宗教であると記しているが、死後や生前など、自分の狭い世界から広い広い世界を考えるのが宗教と言えるのではないか。
- ・哲学は、我々の生きている世界、日常について考える学問だと思う。テキストはどこから読むのがよいのかということ



聞かれることもある。確かに古代ギリシャから順に哲学史を踏襲して学ぶという考え方もあると思う。ただ、私は個人的にはそう思わない。なので、どこから入ってもよいと思う。西田の善の研究から始めてみるというのも有りだと思う。

・神の存在証明について、西田は3つに分けて説明をしている。

①原因から神を求めることについて

アリストテレスの神学というのは、決して信仰の対象ではない。独立に存在して無限で永遠なるものというものが考えられなければならない。それを神的なものと言わざるをえないのでそれを指してい

る。物事を作り出す原因を遡っていくと、生命の誕生→宇宙の誕生と辿っていくが、ビックバンの考え方的に、以前にも何かがあったのではないだろうか。アリストテレスも同じような考え方をしており、最初の原因（第一原理）があり、それを神に求めている。西田はそれを否定しており、因果律（原因と結果）の根拠から、神の存在を求めるならば、さらに一步、神の存在はどうなのかという話をし、神の存在の原因を求めなくてよいのであれば、そも、この世界もそこまで考えなくてもよいのではないかと言っているのではないかと思う。ただ、これは西洋哲学的には、原因に対する要求は長く議論されてきたものであり、一概に否定されるものかと言えばどうなのかと思う部分である。

②身の回りの秩序（法則）から神を求めることについて、

さらにわかりやすく言えば、自然科学で考えられるような自然法則が挙げられる。例えば、人間が作った時計、時計は人間が時計の秩序を与え、一定の法則に従って動いていると言える。では、この世界の自然法則にも、その秩序を作った何かを考えられなければならないのではないか。それを神という存在証明である。言われてみれば確かにというような理屈であり、理性で自然にこれを求める自然神学というような考え方である。これを西田は161ページの真ん中あたりで、それをいうならば、全てのものの秩序を証明せねばならず、それは難しいのではと記している。しかし、（松本先生的には）何かしらの秩序があるというのは、完全に解き明かさなくとも言うことができるのではないかとも思うが…

③道徳からの神の証明について

①②に関しては、理論的な神の証明である。

我々の道徳、何かに対する「良い」「悪い」があるのならば、それを支えてくれるようなもの（道徳的な要求）がなくてはならないのではないか。という考え、これを西田は要求自体は否定しないものの、証明にはならないと言っている。

似たような形の神の存在証明もある。それは、例えば、「神＝完全なる善」とした考え。より明るいというならば、完全なる明るさというものがあり、完全なる暗さというものがあるから、その間でより明るいというものがある。それと同じように理論的に善悪も考えられるのではないか。

ここでいう西田の話からするなら、我々はここでいうような理知的な側面で神を考えている。でも、西田は、神は在るか無いかの理知的なものだけでとらえられるものばかりではないと述べている。

- ・我々の自己の中にある神について、162ページの中で自己の中にある無限の広がりや力について述べている。西田は批判的に言うかもしれないが、実は西洋の哲学の議論の中でもこれは考えられている。例えばデカルトも、我々の精神の中に神の存在を認めており、まさに前に出てきたような「神っている」ように、見たことも無い神のことを考えている（我々有限なるものの中に、神という無限の観念を見出している）。
- ・（2回目だから分かる部分があった。という感想に対して）何度も繰り返して読んでいくと、読み方が変わってくるといふ所がある。不思議なもので、自分が前回の自分とそれほど変わっている訳ではないと思うが、やはり変わっているのだと思う。その度に理解が深まるのである。哲学のテキストというのはそういうものなのかもしれない。

■講演会の感想より

○松本 啓二郎 先生（大阪教育大学 教授）のご講演の感想の一部…（講演会映像はケルンに保存）



- ・グローバル化の時代、よく聞く言葉でいい意味で捉えていましたが、実はそうではないことがよくわかりました。ありがとうございます。
- ・今まで考えたことのない内容のお話でした。松本先生のお考えや捉え方がとても素敵で、哲学に興味を持ちました。このような機会がなければ、哲学とは無縁の人生だったので、お話を聞くことができて良かったです。ありがとうございました。
- ・グローバル化について、先生のお話からその意味を考えることができました。ともすれば、対立がなくなりいい傾向と考えてしまいがちですが、主体の消滅や個性の埋没化にも繋がってしまうのか、怖いことだと思いました。一人一人違うこと、多様性を認めること、私もその一人であること、早急に解を出すことばかり考えずに時には熟考し、自分の感じたことをきちんと伝えていくことなど、いろいろなことを考える良い時間をいただきました。
- ・グローバル化と言うことについて、このような見方ができるのかと新鮮でした。また、何の疑問も持たずに流されている自分が怖くなりました。何でもよしではなくて、一歩立ち止まって批判的にみることも大切だと感じました。紹介して頂いた、ユンガーの思想は100年前のものとは思えないほど、今の世の中に通じるものがあり、難しいと思っていた

哲学が、少し楽しく感じました。分かりやすくお話し頂きありがとうございました。

- ・この夏は、日本史を学びたいと思っていました。松本先生の講演をお聞きし、世界史も学ばなければ日本のことはわからないと実感しました。グローバル化と言われて久しいですが、この言葉の意味をわかったつもりになっていた自分に気づきました。
- ・最後のお話の中で松本先生が「批判」について語っていましたが、哲学って事実を「これってどうなんだろう？」と批判的に眺めてみて、良い面と課題となる面を抽出し、抽出されたことに共通理解しあえる言葉をあてはめていく作業なんだなぁと感じました。

私も講演会の時間、松本先生話を聞きながら、「球になる?」「誰でもない意識?」などと半分以上の時間は話を聞けずに自問する時間に引き込まれていました。テキストにメモしていることも松本先生の言葉ではなく、そのときの自分の疑問や解が書かれています。自分の思考が上伊那教育会館を離れ、遠くて広いところをさまよった。そんな時間を体験させていただきました。来年度も楽しみにしています。ありがとうございました。

- ・「たま」の入り口にいるという強烈なメッセージを受けました。市民的個人から類型人となり個性が消滅してしまわないように、私も問いをもち創造的に考えるようにしたいと思ったし、子どもたちとも創造的な思考を伴う教育活動を創りたいと思いました。
- ・globalizationという言葉、なんとなく使っていたが、均一化・画一化、主体性の消滅という一面を含んでいるということを知りました。そんな時代だからこそ、一人の人間としてのその子を大切にしたい教育が大切だと思いました。



○佐々木 英明 上伊那教育会副会長 閉会のごあいさつ

松本先生、ただ今はご講演をいただきありがとうございました。



先生は冒頭で「グローバル化」とは何かを問い直し、それは単なる国際化でも、便利さの拡大でもなく、世界全体が「たま(球)になる」ことであると語られました。「たま」はどこにも特別な場所がなく、全体が一様で均一化・画一化されていく形であり、その性質は「全体性」「連続性・持続性」「主体の消滅」を伴う。このシンプルでありながら本質を突くイメージは、とても印象的でした。私たちは今、無意識のうちにその「たま」の内部で転がされ続けているのではないかと。

さらに、ユンガーが第一次世界大戦の「総動員」体験から導き出した「労働者の形態」について、その時代における全体性や主体の消滅が、まさに現代の私たちに引き継がれていることを、分かりやすくお話しいただきました。人間が「誰でもない人」となり、個性が薄れ、番号や記号で管理されていく社会の姿は、まさに私たちが直面している現実そのものだと感じました。

教育が形式的・機械的になされていないか。教師の個性を大事にし、子どもと向き合っているか、子ども一人一人を見ようとしているかなど、教育現場に立つ私たちにとっても、非常に示唆に富む問いかけでした。

また、先生には、この二日間のご指導に加えて、これまで4回にわたり取り組んできました事前の読み合わせにおいても、毎回、委員の先生方のレポートに対して、一つ一つ丁寧なご指導を賜りました。そして、読み合わせ範囲の考えるべきポイントを教えていただきました。難解な「純粋経験」や「実在」といった概念を、私たちの日常や教育実践に結びつけながら、哲学を学ぶうえで、まずは自分のとらわれを棄てて、西田の言わんとしていることを、じっくり考えてみるのが大事であることを教えていただきました。

何事にもスピード感やすぐに答えを求めようとする現代の生活において、改めて物事にじっくりと向き合い、自分事として、問い続ける姿勢の大切さを学ぶことができました。

ユンガーと西田、立場も時代も異なる両者ですが、先生が一貫して私たちに示してくださったのは「主体とは何かを問い続ける姿勢」だったと感じています。本日のご講演、そしてこれまでのご指導に心より感謝申し上げます。

松本先生の今後ますますのご活躍とご健勝をお祈り申し上げ、御礼の言葉とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。



閉講式での松本先生(左)と唐澤先生(右) 唐澤先生には主に事前読み合わせ会で毎回熱いご指導をいただきました。

■閉講式より

○感想発表(南箕輪小学校 鈴木 義和先生)



私自身、このような研修は初めて参加させていただきました。校長の松崎先生から哲学対話を勧められたとき、まず初めに思ったのは『自分の性には合わない』ということです。考えることが嫌いなわけではないが、どちらかと言えば考えるよりも感じて行動をするタイプだと自分では思っています。長々と考えるより、まずやってみようと思っている私にとって、哲学は苦手だということからスタートしました。

実際、講習を受けてみて、学校現場で出会ったことや感じたことが、この講習で学んだ純粋経験なんだというのに気が付くことができました。テキストを自分なりに解釈してレポートを書き、多くの先生方と意見を交わしていく中で、考えていくことの楽しさを少しでも感じる事ができ、学校現場で生かすことのできるような新たな視点を持つことができなのではないかと思います。

子どもでも大人でも純粋経験をしていくことは、豊かな自分を作っていくのではないかと。純粋経験をしていくことが学びにつながり、周囲と共有していくことで世界が広がり、社会が成り立っていく。私たち教員は多くの純粋経験ができる場を用意し、様々な経験や体験から子どもも大人もお互いに成長していくことが大切なのではないかという視点を持つことができました。

今回読んだ『善の研究』の中で、理解できたことがあったかどうかは分かりませんが、多くの先生方と考え、真鍋田機会に参加できたことがとてもありがたかったです。この学びを、学校現場に生かしていけたらと思える夏期講習となりました。本当にありがとうございました。

○感想発表(赤穂小学校 片田 越先生)

まず、こうした学びの場をつくっていただけたことが、大変ありがたかったです。この哲学研修に参加した理由は、お世話になっている先輩の先生から勧められたからです。勧められたしやってみるかという軽い気持ちで参加した自分ですが、自分の中には、何か変わりたい、一歩先に進みたいなんて気持ちもあったように覚えています。

初回の読み合わせテキストには、その時どうしても吐き出したかった「つらい」「やめたい」…自分の中に落とし込めない悔しさや焦りがありました。昨年まで参加していた文学とも違い、「一言」ごと「一文」ごとに読み解く、違った難しさもありましたが、参加した多くの先生方の話を聞くうちになんとなく理解できたような、できないような、そんな気持ちになったのを覚えています。

特にこの2日間は少し違ったような、スッキリした気持ちになりました。(今回の研修を通して考えたことは)松本先生のお話の中で、「時間はただ客観に存在するものではなく、私たちが経験を整理するための形式である」という言葉です。

子どもの姿を振り返るとき、成長や変化を時間の枠にはめてとらえがちですが、子どもの経験の根底には時間を越えた普遍的なものがあるという視点を持ちました。

「今、ここ」の出来事だけで判断するのではなく、「純粋経験」や「出会い」など、時間を越えてつなげてくれるものに目を向けていきたいと思います。

また、事故は「世界との関係のなかで現れさせられる存在」「生きる意味」を問うだけでなく、自分を取り巻く大きなものに包まれて自分が存在している「生かされている存在」でもあるのかなとも感じました。

子どもとの生活で、「教える-教えられる」という直接的な関係でなく、共に生き、共にある関係性の中で生かし合う場と考えてもみたいと思いました。



今回使ったテキストは、また気持ちが向いたときに見てみたいと思います。ありがとうございました。

○有岡 竜也 哲学研修（夏期講習）委員長 お礼のことは

先日、ChatGPT に「西田哲学全集 善の研究 にはどんな内容が書かれているの?」と聞いてみました。答えは、

『純粋経験』とは判断や思考によって濁されていない、生きた経験そのもの。西田はこれが哲学の出発点だと考えた。

『实在の統一』とは、意識と世界を切り離さず、経験に内在する「唯一の存在」として实在を捉えること。『善』とは、宇宙と一体の意志が自己に現れること、つまり人格の実現であり、行動の動機・目的・内容をすべて含めて考える。

というものでした。

要約されているのかもしれませんが、この回答ですら私には理解できない…。「宇宙と一体の意志って何?」と考えてしまいます。しかし、生成 AI では万人がわかるような易しい表現で表せない内容だからこそ、これを先生方と議論しながら、西田哲学を読み解こうとすることに意味があるのではないかとともに思います。

会館に行く道中はとても憂鬱な気持ちです。しかし、終わってみるとなんだかすっきりとした気持ちになる。来てよかったなあと思える不思議な会、それがこの哲学研修、夏期講習です。

校種やキャリアを超えて、多くの先生方と話ができる場であることも、とても魅力です。

昭和 24 年、若い先生方が自ら学びたいと始まった夏期講習。目的やニーズは当時と変わってきているかもしれませんが、上伊那教育会にとって、とても大切な学びの場であると感じます。

この 2 日間、松本先生からは西田哲学をわかりやすく伝えていただきました。討議の場面ではすべてのグループに対して一つ一つ丁寧に指導をいただきました。本当にありがとうございました。

事前読み合わせ会では、唐澤先生より西田哲学を通して、現場に寄り添ったお話をしていただきました。出していた資料の枚数も大幅に増えました。毎年毎年、先生のおっしゃる『遺言』がさらに増えていくことを楽しみにしております。ありがとうございました。

話は変わりますが、最近、「矜持を持って仕事ができているか」と自分自身に問うことがあります。

多様化の時代だからこそ、矜持を持って仕事をしなければ、どんどん自分を失ってしまいそうな気がします。「あれでもいい」「これでもいい」から、「なんでもいい」になる瞬間が自分の中にあります。そんな私ですが、せっかくいただいた立場ですので、“楽しんで”、“学んで”、先生方が「来てよかった」と思える会を作ろうと思ってきました。

元より力がない私ですので、どこまでこの会の運営がきちんとできたか自信はありませんが、松本先生、唐澤先生に支えられ、松崎教育会長をはじめとする教育会の先生方に面倒を見ていただきながら、夏期講習委員、哲学研修委員の先生方と共に、この歴史ある夏期講習を無事終えることが出来そうです。

この会に関わっていただいたすべての方に感謝し、お礼の言葉とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。





第76回夏期講習 記念写真

(最前列) 担当幹事、研修副部長、副会長、唐澤先生、松本先生、会長、研修部長、哲学研修委員長、哲学研修副委員長

(2列目・3列目) 哲学研修委員、夏期講習委員、各討議の司会者、レポーター、記録者の先生方

令和7年度 第76回 上伊那教育会 夏期講習

令和7年7月29日 発行

編集・発行・印刷・製本 上伊那教育会 夏期講習運営委員会

哲学研修委員	委員長	有岡 竜也 (東中)	副委員長	小林 千景 (宮田小)
	北 部	鈴木 義和 (南箕輪小)		原 洋平 (箕輪中)
	中 部	大月 美怜 (伊那小)		奥原 淳子 (手良小)
		青木はるか (長谷小)		
	南 部	片田 越 (赤穂小)		佐藤 重浩 (赤穂南小)
夏期講習委員	北 部	大口 琢弥 (辰野中)		
	中 部	牛山 真弓 (伊那北小)		
	南 部	中村 泰地 (赤穂東小)		

上伊那教育会

〒396-0021 伊那市伊那3500番地1-401 (伊那市生涯学習センター「いなっせ」4F)
TEL 0265(72)3416 / FAX (0265)73-3758 / Mail edu@kamiina.jp